

「客人高いかな」

「フム高い、物も相談やがオニテで行かんか」

「客人、私も永い間馬方を仕て居るがオニテと云ふ符牒を聞いた事ない、オニテて何程や」

「馬子、お前が云ふてるオンテて何程や」

「客人解らんと値切つてるのんかいな、オンテとは片手を出して御手、五本の指で一人前五百で行こうかと云ふね」

「そうやからオニテに負けとき」

「オニテて何程や」

「鬼の指は三本やで、三百に負からんか」

「そんな事を云はんとモウ少し張り込んで」

「そんなら鳥手と云ひたいが、鳥に手が無いで鳥足だぞか」

「鳥足て何程や」

「鳥の足の指が三本で蹴爪が少し出てるで、三百と鍋錢

「客人、仲々道中委しいな」

「委しいのうて、年に何度やない日に何度道中してるねん」

「うだ〜云ひなはんな、それでは一人前サ、キで行こうかな」

「サ、キは高いカトウで行き」

「客人、カトウて何程や」

「お前の云ふてるサ、キて何程や」

「客人知らんと勝負仕てるのか、サ、キとは佐々木の紋所が四ツ目やで四百で行こうかと云ふねん」

「そうやよつてにカトウで行き」

「カトウは」

「加藤の紋は蛇の目やで鍋錢一文で行け」

「コラ罫りやがつたら二つに折つて鼻かむぞ」

「早う逃げ〜」

「塵紙みたいに云ひやがるねん」

「二文や」

「そんな事を云はんとモウ少し出んか」

「そんなら熊手出そうか」

「熊手と云ふと」

「四本あつて物を搔寄せる物を熊手と云ふ、馬場に大手、京に繩手、襖に引手、お茶屋に遣手、八卦の鑑定……」

「手盡しの厄拂ひやがな、馬はどうや」

「馬はいらんね」

「罫りやがつたらはりたほすで」

「早う逃げ〜」

……………

「オウ客人、馬はどうやな」

「馬子、今から宮川を越すに越せん事はないが、夕方が急しいで明星泊り、三田屋三郎兵衛玄關横附何程や」

……………

「オ、客人、馬はどうやな」

「何程でも、馬方が來よる……オイ馬子、明星の三田屋三郎兵衛まで何程や」

「ハイ、一人前ヤミで行きまへうか」

「ヤミ……高いツキヨで行け」

「客人ツキヨて何程や」

「ヤミて何程や」

「晦日みそかを形取つて三百ぢやが、ツキヨと云ふと満月十五夜で百五十か」

「月夜に釜抜く慌て者と云ふて、月夜に釜を抜かれたと思ふて只で行かんか」

「何んや只やと、こら、糞壺へ蹴り込むで」

「早う逃げ〜」

「清やん、逃げてばつかり居るねんな、馬に乗れへんのか」